

《短 信》

位相という用語について

真 田 信 治

近年の社会言語学的研究の隆盛に応じて、「位相」という語が各方面で頻用されるようになった。しかし、実際のところ、この語で表される概念は研究者によってまちまちなところがある。この語に關しては、その来歴について改めて跡付けし検討する必要がある。

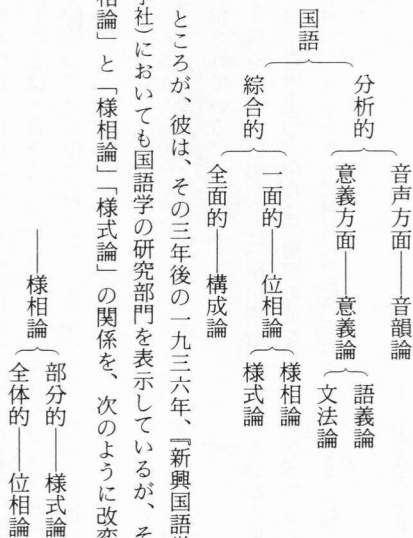
「位相」という語はもとは自然科学での術語である。それを特に言語の研究に応用したのは、周知のように、菊沢季生（一九〇〇〜一九八五）である。菊沢はもと工業化学を専攻し、後、東北帝国大学で山田孝雄の教えを受けた研究者である。（なお、発音はキクザワである。「国語年鑑」の「国語関係者名簿」では、はじめキクザワとなっていたが、本人の指示で一九六六年版からキクサワと訂正されている。）

菊沢はその著『国語位相論』（明治書院、一九三三）において、次のように述べる。

水は固体である時は水といひ、気体と化せば水蒸気とか湯気とか唱へられるのでありますが、物理化学的に見ますとこれは全く同一の物質でありまして、たゞ位相 (esatp) を異にするに過ぎないと認められています。この「位相」なる術語を国語学にも採用致しますならば、言語は社会が位相を異にする毎にその位相を異にし、国語学者は、この様に国語が位相を異にする毎にこれを研究する必要がありますといふ事になる訳であります。国語学の総合的研究の一面にはこの位相の相違による特殊の事実を認識し、位相

の相違による変化の状況を究め、その間にはたらく法則を見出すべき方面の存する事が分るのでありまして、この様な研究部門を名付けて位相論(英語にすれば *diaology*)と唱へようと思ふのであります。——中略——位相論は、言語社会を背景としてその位相の相違を考察すべき場合と、音声言語か文字言語か等の表現様式の相違を背景とする位相の相違を考察すべき場合とに二分せられるのであります。即ち「様相論」は社会を背景とする狭義の位相論であり、「様式論」は表現様式を背景とする方面の位相論を指すのであります。

そして、国語の研究上における位相論の占めるべき位置を、次のような表に示している。



ところが、彼は、その三年後の一九三六年、『新興国語学序説』(文学社)においても国語学の研究部門を表示しているが、そこでは「位相論」と「様相論」「様式論」の関係を、次のように改変している。

すなわち、ここに位相論の範囲がせめられる結果が生じたわけ

である。『新興国語学序説』で示された形は、一九三九年の彼の『国語学読本』（思潮社）でも踏襲されている。ここに今日のこの用語の概念の混乱の一つの芽があらうかと思う。国語学の世界では、従来、位相論を、場面論をのぞいて、属性論に限定して来たきらいがある。しかし、最近の社会言語学では、位相差という用語を社会的属性差とともに文体（スタイル）差を含めるものとして使う傾向がある。これは菊沢が最初に『国語位相論』で示した枠組みに近いわけである。菊沢におけるこのような改変がどうして行われたのか。今となつては知る由もない。が、次のようなことが考えられたのではないだろうか。すなわち、「国語位相論」は「位相論」と銘打ちながら、実際はその一部、彼のいう「様相論」だけを扱つたものである。「様式論」にはまったく触れられていないのである。しかし、「位相論」の名はこの書によつて一般的なものとなつた。そこで、「様相論」を格上げし、「位相論」を「様式論」と同レベルのものとして並べておけば、「様式論」については改めて別のステップでという前提で、少なくとも「位相論」に関しては一応の完全記述を果たしたということができる、と。

なお、筆者などは言語地理学の視角から、この位相論を topology に擬して考えたことがあるが、やはり菊沢創案の phasology の方が社会言語学的観点からの枠に近いので、何もわざわざ混乱させる必要もないと今は思っている。ただし、phasology の形はどうか。phasiology とする方がいいのではないか。

ところで、最近、本名信行氏が sociolinguistics における register という術語の訳語にこの「位相」を当てていることを知つた（『言語』一九八八年五月号）。register はもともと音楽用語で「音域・声域」

のことであるが、sociolinguistics では場所、状況からみたことばの使用域の意味に用いる。そこにはスタイルの概念も含まれており、話しことば・書きことば、フォーマル・インフォーマルなどの基準も関係している由であるから、確かに我が「位相」に近い。しかし、やはり「位相」は主あることばであるからここで採ることはどうかと思う。ちなみに、最近公表された『新言語学術用語集——社会言語学関係——』（柴田武・井出祥子担当）では、register は「言語使用域」と訳されている。

本稿を草するに際しては、徳川宗賢氏からいくつかの情報を得た。なお、古田東朔氏からは、菊沢の論をめぐるシンポジウムが雑誌『コトバ』（一九三三年二月号）に掲載されていることを御教示いただいた。

— 大阪大学助教授 —